

ボリビア

移住者を取り巻く状況

アンデスを越えた最初の日本人たち

日本人の南米移住の中で、最も遅く計画的集団移住がなされたのがボリビアである。

しかし、日本人が移住した歴史の古さから言えば、ボリビアはペルー次ぐ2番目の移住先国である。それというのも、1899年(明治32年)、さとうきび農園の雇用農として初めてペルーへ入国した移民が、農奴的なその労働条件、生活環境のひどさから大半が脱耕し、そのうちの91人が同年9月ボリビア領内のアマゾン河上流地帯へ移った。しかし、ゴム採集労働も過酷なもので、再び脱出した。わずかの食料も食べ尽くし、1人の餓死者を出しながら、ペルーへ引き返したが、途中で待ち受けていた問題や苦難は一通りではなかった。そのうちの2人が残留し、最初のボリビア移民になったからである。

なお、国本伊代は、同じ第1回ペルー移民で、8月に入国しオルロで「ボリビア鉄道」に雇用された井畑三太郎が最初の日本人移民ではないかと言っている。

第3回渡航者から沖縄県人が加わりその内の何人かがボリビアへ転住したと考えられる。第4回渡航の沖縄県人は、最初からペルー領アマゾン地方へのゴム液採取労働者としてやってきたが、ボリビアのゴム産業の好況を知り、ボリビアへ転住した。この時既に7人の沖縄県人がいたという。その後もペルーへの移民が続き、さとうきび耕地を出た移民たちの中から、アンデス越えをしてアマゾン地域でのゴム採集に従事する者が増えていった。しかしゴム景気が過ぎると、沖縄県出身者の多くはリベラルタ方面へ出て定住するようになり、さらにラパス、サンタクルス、オルロなどへ転住する者がいた。そのため「リベラルタはボリビアにおける沖縄県民の最初の定着地」と言われ、戦後移住に大きく貢献する。

日本から直接ボリビアの都市部に来て商業に携わる者も出始めたが、戦前には計画的な移民はなかった。

戦後移住

オキナワ移住地

1948年(昭和23年)ラパスおよびリベラルタの沖縄県人が、第二次世界大戦の最終戦場となり焦土となった母県に救援物資などを送ったが、さらに沖縄県人をボリビアへ移住させる計画へ発展した。翌年リベラルタ沖縄県人会総会で移住地建設が決議された。

「移住地建設事業趣意書」が作られ「当国存在の同胞は、物質的成功を急ぎ腰掛け主義で早く郷里に錦を飾らんと思想にあり」「永久的な基礎的な殖民事業に欠けたるを遺憾」として「廃墟の地と化せし沖縄に更生をさせるには」「ここボリビア国を第二の故郷と定め、永久的な移植民地の建設(中略)の実現に協心協和していくことこそ吾らに負わされた急務」と痛感し、「土地の選定獲得の実現」を目指した。

1950年(昭和25年)土地選定委員をサンタクルスに派遣し、グランデ河の対岸に有望な土地を見つけ「うるま移住地」とした。当時沖縄は米国による政治支配の強化の中で、農地が広大な軍事基地に変わりつつあった。それらの建設工事が終わると過剰労働力と、農地を失った農民に対する対策として、琉球政府は南米移住を取り上げ、移住使節団を派遣した。

1954年(昭和29年)2月、使節団はボリビアに到着、約1ヶ月後に沖縄からの移住がボリビア政府から認可されたこと、米国政府よりボ国農務大臣を通じて援助資金が交付されること、80家族と80人の独身者による移住者集団を8月までに送ることなどを打電した。直ちに移住者募集が行われ、4000人の応募があった中から適格者400人が選ばれた。第一次移住者275人を乗せたオランダ汽船「チンヤダネ号」は1954年(昭和29年)6月那覇港を出て、8月6日サントス港着、そこから汽車でボリビアへ向かい、14日終着駅パイロンに着いた。8月15日、日本の終戦日が「うるま移住地」の入植日になった。開拓の共同作業が始まったが、井戸水は塩分が強く、飲むとたちどころに下痢を起し、野菜にかけると枯れた。約2ヶ月後に大型井戸が完成したが、それまではグランデ河の泥水の上澄みを使った。2ヶ月後最初の死者が出た。原因不明の「うるま病」の始まりで、12月に入ると患者が急増、翌年2月にはグランデ河の大洪水に見舞われた。4月までに15人の犠牲者が出てパロメティアへ移ることになった。8月、全員が移転を終わったとき移住者の顔にやっと笑顔がもどった。しかし、ここは土地が狭く永住地とはなりえなかった。再び移住地探しが始まり、ボリビア政府の情報に従い現在のオキナワ移住地を選定した。ここは、パロメティアの60倍にあたる15,000haあった。1956年(昭和31年)7月移転を終わり、入国2年目によく50haの地主になった。

サンファン移住地

沖縄県人移住の翌年の1955年(昭和30年)7月、最初の移住者14家族88名がサンファン移住地に入植した。日本を出発してから70余日もかかる長旅であった。

ここへの移住には二つの異なる方法で準備が進められた。一つは、サンファン移住地の基礎を築いた西川利通が計画した、サトウキビの栽培と製糖工場の建設を目的とした計画移住であり、もう一つは、日本とボリビアの政府間で交わされた移住協定による計画移住である。ボリビア移住の募集を始めた時、移住協定は交渉中で、協定締結以前に入国できるのは一船団限りとされた。そのため第1回の移住者は、協定発効後に送り出された移住者と区別して「西川移民」と呼ばれた。

移住者たちは初めて見る原生林の様に圧倒され、これらの巨木に斧一本で立ち向かう開拓の厳しさに身が引き締まる思いであったという。彼らは耕地配分の測量もされていない原生林の中で、手磁石を使って耕地の測量にとりかかり、道路を造った。道の両側に1



上空から見たサンファン移住地
『日本人移住100周年史 ボリビアに生きる』
(2003年ボリビア日系協会)より抜粋

家族50haの土地が与えられ、9月から始まった巨木の伐採は、大半がボリビア人労働者の手によって行われた。移住者たちは彼らから現地特有の伐採道具の使い方や、樹木の選び方や利用法、野生動物の狩猟法と調理法などを学んでいった。特に椰子を利用した簡易住居は高温多湿の現地に適しており、長く移住者の住居や収穫小屋として使用されることになった。入植1カ月後には椰子葺き小屋の校舎で初等教育が始まった。「食べることが先決である」と考えた移住者たちは、11月に山焼きをして米を植え

付けた。現在の移住地の基幹産業となっている米作がこの時はじまったのである。

翌年3月には米の収穫が始められたが、それだけでは1年間の生活には不十分で、携行した物資や不要の機械などを処分して生活資金を得ようとした。ところがこれらを預かっていた組合はより有利に処分しようとして、すぐに換金しなかった。さらに組合がこれら処分資金の一部を組合の運営に流用したことが発覚、組合員と幹部の間に亀裂が生じ、移住者受け入れ組織である「サンタクルス日本人農業協同組合」は解散し、製糖事業計画は失敗に終わったのである。製糖工場建設のためにすべての資金をサンファンに投じて無一物となった西川利通は、1956年に家族を伴いサンファンを去っていった。この計画が失敗に終わったのは、資金や技術的な援助が得られなかったからである。

こうしたトラブルは、他の移住先国でも移住の初期によく起こった問題である。

「西川移民」に続く第1次計画移住者は、1957年(昭和32年)6月に到着した。西川移住者は自分たちが作った米を炊き、鶏をつぶし、河で釣った魚を料理して、心を込めて第1次移住者を迎えた。しかし、新移住者たちは、目の前にある掘っ立て小屋同然のみすぼらしい宿舎に愕然としていた。しかもこの年は異常に雨が多く、さらに熱帯とは思えない寒波が襲い、冬物の準備もない彼らは寒々とした生活をしなければならなかった。このような状態にもかかわらず、日本では第2次移住者の募集が始まっていた。移住者たちは、送り出しのみに懸命な海協連や外務省に限りない不信を募らせた。新聞社などに「アメオオク、ミチナク、エイノウフカノウ」と後続移住者の送り出し中止を訴えたが、5カ月後には第2次移住者が、翌1958年も第3次から第6次までの移住者が到着した。

うち続く異常気象の大雨で、作物は採れず、道路は「犬も通わぬサンファン道路」と言われる状態だった。天災と人災を混ぜて移住地は混乱し、人心は荒廃を極めた。

多くの移住者がアルゼンチンやブラジルに転住したり帰国したりした。踏みとどまった移住者たちは移住機関等の援助指導を得ながら再建に努力した。サンファン農業協同組合は改組され諸事業、借入金対策、教育などが組織的に行われるようになり、日



前川知事とボリビア香川県人会の皆さん

本側でもサンファン移住地再建委員会の設置で移住者の送迎は受け入れ態勢が整うまで中止された。徐々に道路、学校、病院、試験場等も整備されてゆき、営農も試行錯誤を重ねながら米作、大豆作、養鶏、果樹、牧畜、加工工場など多角的経営に移ってゆき、市場も国内だけに留まらず、輸出作目も増えている。

かつて、不良奥地移住地の見本のように見られていたボリビアの移住地は、農家の平均所有農地は約二百数十ヘクタールに及ぶ大農経営であり、複合多角経営をする自立した模範的な移住地になっている。今では近辺のボリビア人移住地からの見学者も多く、日本人移住地側もボリビア人への協調、技術指導に意を払い、国際協力的一端を担っている。

なお、第1次から1992年(平成4年)の第53次移住までに入植した移住者数は、302家族、1,634名と単身51名の合計1,685名であり、2000年(平成12年)の時点で、サンファン移住地の定着率は20%強となっている。

これらの入植移住者を出身県別に見ると、長崎約46%、福岡9%、北海道、高知、熊本、東京の順である。香川県からは1957年(昭和32年)に松

岡家族が移住、翌年岡根、星野等7家族が入植して8家族となったが、内4家族は帰国した。サンファン移住地に定住しているのは、星野および岡根の家族であるが、サンタ・クルス州には分家も含め約10家族弱で構成する県人会がある。